2016 年 10 月 31 日(月) 第 12 回「聖書で読み解く映画カフェ」上映作品

「招かれざる客 」の見どころ

GUESS WHO'S COMING TO DINNER 1967 年製作 アメリカ映画 108 分

上映前

●第 40 回アカデミー賞では作品賞を含む 10 部門の候補となり、キャサリン・ヘプバーンが主演女優賞を、ウィリアム・ローズが脚本賞を受賞。公開を前に亡くなったスペンサー・トレイシーの遺作でもある。

スタッフ

監督:スタンリー・クレイマー

製作:スタンリー・クレイマー

脚本:ウィリアム・ローズ

撮影:サム・リーヴィット

音楽:フランク・デ・ウォール

アカデミー賞受賞・ノミネート:

作品賞 スタンリー・クレイマー

監督賞 スタンリー・クレイマー

主演男優賞 スペンサー・トレイシー

主演女優賞 キャサリン・ヘプバーン 受賞 (アメリカ俳優の中で、唯一主演(女優)賞 4 度受賞。「勝利の朝」1933「招かれざる客」1967「冬のライオン」1968「黄昏」1981

助演男優賞 セシル・ケラウェイ ノミネート

助演女優賞 ビア・リチャーズ

脚本賞 ウィリアム・ローズ 受賞

編集賞 ロバート・C・ジョーンズ ノミネート

美術賞 ロバート・クラットワージー、フランク・タトル

編曲賞 フランク・デ・ヴォール

キャスト

マット・ドレイトン演 – スペンサー・トレイシー、新聞社社長。リベラリストとして娘の結婚を理解しつつも認めることができない。

ジョン・プレンティス演 – シドニー・ポワチエ、世界的に高名な黒人医師。妻子を事故で失った過去を持つ。結婚への障害を現実的に理解している。

クリスティーナ・ドレイトン演 – キャサリン・ヘプバーン、マットの妻。娘の結婚にとまどうが娘の幸せを思って結婚に賛成する。

ジョアナ(ジョーイ)・ドレイトン演 – キャサリン・ホートン、ドレイトン夫妻の娘。ジョンとの結婚に障害などないと信じ切っている。

ライアン神父演 – セシル・ケラウェイ、ドレイトン夫妻の友人。ジョンとジョーイの結婚を心から祝福する。

ジョンの母親演 – ビア・リチャーズ、息子が白人女性と結婚することに驚きつつも、息子を信じて結婚に賛成する。

ジョンの父親演 – ロイ・グレン、苦労して育てた息子の結婚を認めることができない。

ティリー演 – イザベル・サンフォード、ドレイトン家の黒人家政婦。ジョンを認めようとしない。

ストーリー

世界的にその名を知られる黒人医師ジョン（シドニー・ポワチエ）はハワイで知り合った白人女性ジョーイ（キャサリン・ホートン）と人種の壁を越えて結婚を誓い合い、互いの両親の許しを得るためサンフランシスコ空港で飛行機を降り、タクシーでドレイトン家を訪れる。ジョーイの家には、黒人のメイド、ティリーがいて、二人を出迎え、けげんな表情になる。

帰ってきたジョーイの母、クリスティーナ（キャサリン・ヘップバーン）は、ジョーイから婚約者を連れてきていると報告を受け、驚くとともに喜んだ。「彼はすばらしい男性だわ。」ジョーイが熱っぽく語るのを共感を持って聞いた彼女は、別室から現れた黒人青年を人目見て声が出ない。 娘の婚約者が黒人だったとは！

やがてジョーイの父、マット・ドレイトン（スペンサー・トレーシー）が帰宅した。マットは新聞社を経営しており、人格者で通っていた。その彼に、ジョンは言った。「私たちは愛し合っています。・・・で、結婚に対するご両親の反応を見るためにこちらへ・・・。」マットも、クリスティーナ同様、あっけに取られた。自分は、新聞社主として、これまでも人種差別と戦う論調を展開してきた。だが、我が子が黒人と結婚することになるとは想像もしないことだった。最初戸惑っていた母クリスティーナ（キャサリン・ヘップバーン）も、娘の喜ぶ様子を見て次第に祝福する気になる。ジョンは、学界でも有数な人物であり、近くジュネーブの大学院に迎えられることになっているということは、マットも知ってはいるのだが、黒人と白人との結婚には、想像を絶する困難がある事を考えると、マットは割り切れなかった。ジョンは今夜、ニューヨークへ立ち、その後、スイスへ向かうという。結婚の承諾が得られれば、ジョーイも連れていきたいのだと。そして、向うで式を挙げる時に改めて招待すると。マットは社に電話し、ジョン・プレンティスの経歴を調べさせた。しばらくして、電話が来た。「1954年、ジョン・ホプキンス大学卒業、1955年、エール医大で助教授3年、ロンドン医大で教授3年、世界保健機構で副理事を3年・・・」「もうよい！」マットはいら立ち電話を切る。クリスティーナがマットに近寄り、こう言った。「ジョーイは赤ん坊の頃から良く笑う明るい子だった。でも、あんな幸せな顔は初めて。だから喜んでやりたいの。信念を通す娘を私は誇りにしたい。」テラスでジョーイとジョンが歓談しているのが見える。マットは無言で見つめた。マットがクリスティーナに言う。「即答は無理だ。お前はジョーイの情熱につられて冷静な判断を失っている。」

ジョンの両親も空路でサンフランシスコへ向かっていた。息子から結婚するという電話を受けたが、相手のことは知らされてない。果たして、空港で迎えに来た息子の相手が白人と知り、父（ロイ・E・グレン）と、母（ベア・リチャーズ）は、驚嘆した。マットの親友であり、良き相談相手でもあるライアン司教（セシル・ケラウェイ）がドレイトン家を訪れた。ライアン司教はクリスティーナから娘の結婚話を聞き、当人たちにも会って歓迎したが、マットが不機嫌なのを見て言うのだった。「マット、君はあの男に腹を立てているんじゃない。誰よりも自分自身にいらだっているんだ。」マットは反論した。「君には子供がいない。こんな時の父親の気持ちを分かるはずがないんだ。世間の目は冷たい。偏見はどの世界にもある。」それを聞き、ライアン司教は言う。「君を30年間尊敬してきたが、今日は情けなく思うよ。君を床にねじ伏せてやりたいよ。」ジョンの両親がジョーイの家に着いた。お互いに当惑しながらの挨拶を交わす。父親同士は、「私は少し、せっかちすぎる気がしますが・・・。」「同感です。」と、意見が合う。母親同士は息子、娘を理解し、この結婚を認める方向で気持ちが一つになった。分散して、意見の交換が行われる。テラスにいたジョンの母親は、そこへ来たマットに言うのだった。「あの二人は強く求め合っています。あなたと主人には、悪い部分しか見えないのです。あの子たちの気持ちが少しも分かっていない。あなたが結婚した時の奥さんに対する感情は抜けカスになってしまったんですか？」

一方、ジョンは、別室で父親に食ってかかった。「古びた信念を唯一最良と頑強に押し通す、そんな世代が死に絶えるまで僕たちは重荷を背負うんだ。自由になれない。僕

は黒人としてでなく、人間として生きたいんだ。」そしてマットは、一人テラスでじっと考えにふけっていたが、ふと、「私としたことが・・・」と、決意の表情になる。マットは皆を集めた。そして、おもむろに話し始めるのだった。「親の意見など問題じゃない。肝心なのは当人たちの愛情の深さだ。私とクリスティーナの半分もあれば立派なものだ。」クリスティーナは、夫を見て涙ぐむ。夫は娘の結婚を理解した！　そして、改めて夫を尊敬のまなざしで見つめるのだった。マットはジョンの母親の言葉が相当応えたらしい。なにしろ、“愛情の抜けカス”と言われてしまったのだから。マットは続ける。「ただ、これから多くの人たちの反感と嫌悪が君たちを待ち受ける。永久にそれを乗り越えていかねばならん。だが、互いの絆を強くし、決して負けるな！」 マットは、ジョンの父親の肩をたたき、ジョンとジョーイの出発を前にディナーの部屋へ誘うのだった。

エピソード　映画を地で行く俳優陣！

●母親役のキャサリン・ヘップバーンと父親役のスペンサー・トレイシーは、現実でも事実婚状態のパートナーだった。スペンサーの家庭の事情（カトリックで、離婚できない）から結婚しなかったが、この映画の撮影が終わってから 17 日後に他界したスペンサーを看取ったのはキャサリンと、スペンサーの妻ルイーズ。映画の中で苦悩し続けるスペンサーだが、その苦悩は本人も現実に味わったものだけに、せりふに重みがある。ヘプバーンは、彼を思い出してつらいという理由でこの作品の完成版を観ていない。

●黒人青年役のシドニー・ポワチエも、両親は西インド諸島バハマのトマト農家。たまたま両親がトマトを出荷に来ていたマイアミで産気づき、早産で生まれたためアメリカ市民権を獲得。その後、「野のユリ」で黒人初のアカデミー主演男優賞を取るまでの苦労は相当なものだったろう。この映画でも苦労して成功した人物として登場しているが、本人の生き様に似ている。「危険を冒して前へ進もうとしない人、未知の道を旅しようとしない人には、人生はごくわずかな景色しか見せてくれないんだよ。」(ポワチエ)

2009 年には大統領自由勲章を受章。彼以外の受章者にはアメリカ初の女性最高裁判事サンドラ・オコーナーや理論物理学者のスティーブン・ホーキング、デズモンド・ツツ元大主教など人種や性別、身体障害などでハンディを負ったマイノリティーの人々が選ばれている。

●終始魅力を振りまいていた娘役のキャサリン・ホートンは、キャサリン・ヘップバーンの姪（妹の娘）。

この映画の見どころ

●1967 年公開の作品だが、この年はハリウッド映画変革の年といっても過言ではなく、ニュー・シネマの夜明け『俺たちに明日はない』(ボニーとクライドというギャング夫婦の自由奔放な生き方)と『卒業』(恋人の男性が、花嫁を結婚式場からさらって、愛を貫く。)が民衆に支持されオスカー候補になった年でもある。この映画も、従来の保守大国アメリカの、権威主義、既成秩序といった固定概念を思いっきり打ち崩すような作品。

その固定概念とは、人種差別問題。

⇒”差別”の本質とは何か？

⇒とても心に響いたセリフは？（脇の人にも）

などを考えながら映画をご覧ください。

上映後

●この作品は人種問題の映画。アメリカという国は、白人の黒人に対する差別と迫害、搾取の上に国力を拡大した〝負の歴史を持っている。それは、まるでアメリカ人のDNAのように、一見それを克服したと思っている人の中にも残っていて、ある時突如として頭をもたげるが、その顕著な例は、異なる肌の色を持った者同士が結婚するとき。

だがこの映画の優れた点は、単なるアメリカの国家としての黒人迫害・差別というより、誰にでもある内なる人種問題として普遍化したこと。

●テーマ普遍化･現実化のための 2 つの工夫:

①人物構成: 上記のように、この作品は、映画で主人公の女性の父母を演じたスペンサーとキャサリンが現実生活でも事実上のカップル、その娘を演じたキャサリン・ホートンはキャサリン・ヘプバーンの実の姪(妹の娘)、そしてその婚約者の黒人青年を演じたシドニーは現実に差別と闘った黒人という、現実の人間関係をうまく映画に当てはめた。したがって、彼らの演技には演技以上の現実感がある。

②場所の設定: そのため脚本のウィリアム・ローズは、劇中のほとんどを 1 つの家の中で描き、観客を、他の景色や人物に気を奪われることなく、映画のテーマに集中させ、まるで舞台劇のような深いリアリティーを生み出すことを可能にした。

③長いセリフでテーマを“聴かせる起承転結の“結”の迫力: その極め付けが、ラストの、父親の演説。父と娘(ドレイトン家)、父と息子(プレストン家)の対立が頂点に達しようという時に、父親の言う「これが最後の“命令”だ。黙って聞きなさい。」のひと言。 約 15 分間、家族一同も観客も、“命令”に従ってただ「聴く」だけ。スペンサー・トレイシーが、病を押して、最後の力を振り絞るかのように切々と説くこの「父親」の存在感には圧倒される。普通なら、どんなにカメラワークを駆使しようが、退屈感を覚えるところだが、そうさせないのは、この映画に人間普遍のテーマがあるから。

●マットを最後のテーマ(結論)に導いた2つの言葉::

①ライアン司教のひと言:「マット、君はあの男(自分の愛娘を突然奪い去ろうとしているジョン)に腹を立てているんじゃない。誰よりも自分自身にいらだっているんだ。」

彼が一番ショックを受けたのは、娘が黒人の男性と結婚することではなく、リベラルだと信じていた自分の奥底にある保守的な一面、人間は肌の色に関係なく平等だと日頃論陣を張り、娘もそのように教育し、見事に成功したのに、突如頭をもたげた内なる差別の現実に遭遇したこと。

＊差別心は人類共通の“負”の遺産: ナチスのユダヤ人差別。南アのアパルトヘイト。日本人の、部落民、アイヌ民族、在日韓国人に対する差別。先頃の恐るべき障がい者大量殺人。

＊白人だけでなく、映画の中の黒人メイド、ティリー(マチルダの愛称)も例外ではない。彼女は“黒人は白人とは違う”という固定観念の中に生きており、それを崩そうとする同じ黒人のジョンの存在が許せない。それは本人も気づかない嫉妬心だが、これもまた、黒人の黒人に対する内なる差別。

＊差別の根源は、人間が神よりも賢くなり、誰よりも己を高めようとした人間の“原罪”にある。それは人間 (アメリカ人だけにあらず) の持つ罪の DNA であり、イエス様の血潮によって根底的に聖めていただかない限り、生涯付きまとい、随所に頭をもたげる。

②ジョンの母が言ったひと言:「あの二人は強く求め合っています。あなたと主人には、悪い部分しか見えないのです。あの子たちの気持ちが少しも分かっていない。あなたが結婚した時の奥さんに対する感情は抜けカスになってしまったんですか？」

彼は、長年連れ添った妻への、燃え上がり、あまりの激しさに燃え尽きるような若き日の愛情を忘れかけていたことを思い出し、“予想される一切の障害にひるむことなく、互いの愛を信じて貫こうとする「愛」の力”にもう一度思いを致す。

結び

●人間の罪の DNA を取り除く力は、私たち人間のうちにはない。人間の歴史は、個人間、家庭、社会、国家における差別(さげすみ、憎しみ)から来る、迫害と戦争の繰り返し。この“魔の力”からの脱却はイエス様の十字架に表された“神の愛”にのみある。

Ⅰヨハネ 4:18「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」

●「誰が晩餐会に出席するのか？ Guess who’s coming to Dinner?」(映画の原題)

答えは、この愛(本当に相手の幸せを願う心)によって、罪から来るあらゆる差別と偏見を乗り越えた人々。それは、私たちが、地上のあらゆる違いを超えて、主のもとにやがて相まみえる〝天の宴(うたげ)〟(ルカ22・30)の祝福の前味でもある。